

二人のムスタツファ

第四次中東戦争が終わった直後
カイロに行った

飛行機から一步踏み出した時

四歳の亜理は 息が出来ないと言った
硝煙ではなく

五千年しみついた羊の臭いのせいらしい

建物の前の土嚢やレンガの塀

ヘッドライトに残る青いペンキは

灯火管制の名残り

砂漠から市街地に入って

宿に着く前に

日本の、戦後三十年の甘えは消え
覚悟が固まった

駐在員の交替で

現地雇いの人々のみせる

去っていく家族と 入ってきた家族への

氣くばりのバランス

なじみのないアラブ人の顔に

取り巻かれると

人質になった気分

しかし ここで気合は抜けない

コックに子守に秘書は

さしあたり

首にはならない自信をもって

紹介される

アリ・ガブリ

ピラミッド周辺の盗賊の子孫

偉い客用の砂漠のパティー屋

サミール

新聞社勤務 四十歳に近いが安月給で

結納金が払えず独身 たいしたネタは

持ってこないが情報屋

サーデック

元税官吏で税関の手続き一切

ムスタツファ

運転手にもなるが 運転免許証はない

役所まわりの便利屋

e t c

自分の名前が聞こえた時

彼らは首と目で挨拶をした

日本語で説明されている我が身の

紹介の内容を理解しているのかどうか

好奇心 おもねり あきらめ 無

せぶみの眼が夫の方へ行く

大男で浅黒い ちぢれつ毛の便利屋は

毎朝ノッソリと現れた

夫の気持ちをどう読んだものか

呼吸を呑みこんで動いた

秘書でなく彼の来る時間が

夫の勤務開始となった

アパートの門番も エレベーターボーイも

ムスタツファという名前なので

右の目の下にある三センチばかりの

傷あとにちなみ 便利屋のムスタツファに

ッキズと通り名をつけた

エジプト組み立ての古いフィアットは

エンジンが一度でかかれば拍手ものだが
「キズ」は目的地に何とか運んでくれた
線路の上でエンストを起こせば

ジャン・バルジャンの様に

車を手で押し上げ

近づく電車との難を免れた

エジプト軍ボクシングヘビー級の

チャンピオンだったという

取材合戦の中で 背の低い夫が

欧米の記者 カメラマンに押されていれば

ランプをこすらなくても

あの大男みたいに黙って

「キズ」は夫を足からかかえあげ

人垣の頭越しに

カメラアングルを切り開いた

四歳と二歳の重理と亮介を

肩にとまらせ アラビア語を教え

グローブの様な手を上手にあやつり

手品をしてみせる「キズ」の目は

エジプト人でも日本人でもない

小さな二人の大好きなムスタツファ

「キズ」は毎晩 小さなホテルの

コンシェルジュをしていた

そこで世話をした日本人も含め

歴代の駐在員からの「キズ」への

英文の感謝の手紙の束を

私たちに読ませ

信用のパスポートとした

そこへ

もう一人のムスタッフアが登場

ダブダブズボンの上にシャツを出し

三十代であるのに

小肥りの田舎のおやじ風

はじめまして

一言いうのにもツバを飛ばす

大きな口

パレスチナ人のヨルダン国籍

元ゲリラという

情報屋希望

PLOの指導者に顔がきくという

ふれこみだ

秘書もコックも帰ってしまった

午後三時の面接

炎天下 四十五度

ふつうなら昼寝の時間

ベトナム戦争の取材が終り

第四次中東戦争が終ったカイロに

転勤してきた夫

沼地のベトコンから

砂漠のコマンドへ

夫はロマンをみつける青年の眼差しで

腰を浮かす

交渉の最中に全身で興味を示す

未来の雇用主へのあなどりが

素朴さを武器に使っている彼の

口元に走った と 私は見た

すかさず

彼は立ち上がり 失礼といって

シャツを脱いだ

何の幕開けか幕間なのかわからない

私たちの目の前に

くると背中をみせた

縦一直線に約四十五センチ

太ぶとと肉の盛り上がった傷あと

その両側に無数のポチポチ

イスラエル軍の砲弾の破片を

摘出した跡という

立派な傷への驚きと称賛が

契約の成り立ちと言う

第二のムスタッファの思惑通りとなった

何度 他人に見せてきたかは知らないが

背中^がの傷がPLO発行の

彼のパスポートであった

二人のムスタッファが傷だらけで

顔^がと背中^がという通り名に

呼び変えた

夫は今や、背中^がのフラザーだから

妻である私は、背中^がのシスター

だから 持ち物は全て共有という

だからだから……

国土を失ったパレスチナ民族の

苦しみを知った人間は

道義的責任として物心両面の援助をせよ

と ストリンガー契約を解釈してしまった

無欲な顔をしていると

物を持って追いかけてくる日本人の性向を

とうに知り尽くしている、顔^がは

背中^がを黙ってみていた

毎日出勤している自分よりも

時々やってくる、背中^がの方が

報酬が高そうだと知りながらも

自分の方がいわば身内

そんな自信が、顔の余裕

「アラファトは泥棒」といっては

私に笑いかけた

背中、は

雑収入が増えてきたのか

ズボンはラッパになり

髪にボマード

断食月に食物も飲み物も口にせず

干からびた顔をしている、顔の傍に

テカテカした顔を出し

コックの運ぶ茶をすすする

「ムスリムじゃないの?」と皮肉の問いに

「要は心」とケロリと答えた

みやげと称し 手にはウオッカの瓶

ソヴィエト人記者を手玉にとつて

せしめてきたと得意顔

予告ばかり続いたあと

背中、の親分のPELOの大物と

夫が会う段取りとなった

二種類の主人の間を

背中、は

はしゃいで駆けまわる

ある停電の夜

その大物が側近の一人というのか

少なくとも

背中、よりも身近かな子分と

ふらりと

我が家に立ち寄った

所望したウイスキーを

ローソクの灯にかざし飲んでゐる姿には

自らの座る所 全て自らの場所にしてしまう

風格があつた

しかし

日本に行く話になると……

全体でいえば 東京のP.L.O.の代表部の

ことよりも

真珠の大量買い付けの話の時間が長かつた

とりあえず

個人商店の発展が大切らしい

国のない「背中」は一軒の家に住み

パレスチナ料理を御馳走してくれた

自分の国に住んでも家のない「顔」は

エジプト料理を御馳走してくれた

両方美味であつたけれど

訪問のあと味は大分異なつた

上流社会の夕食を真似たのか

私たち親子四人と「背中」夫妻が

テーブルに着いた

鶏料理の作り方に夫妻で熱弁をふるう間

大小五人の子供が汚れた顔を出し

窓から伺う

手洗いを所望した私がお勝手を通り過ぎると

私たちの食べ残した大皿に

子供たちが群がっていた

無色有色の結晶体 付着物のある便器を

逃れて扉の外に出ると

「背中」が汚れたタオルを持って立っていた

オーデコロンを私の手にふりかけ

トイレのあととはこうするものだ という

顔の家では すっかり逆

亜理や亮介に見せる顔はいつもの

顔の顔で自分の子供に見せる顔も同じ

共同炊事場に立った奥さんは

私を招じ入れ モロヘイヤスープの作り方を教えてくれた

物見高い隣人たちも総出だ

片付いた一部屋の自分のベッドの下から

おし頂くように出した 彼の宝の手紙の束

ここにしまつてあると

息子を片手で抱きながら 指し示した

八年たった今

我が家でのムスタツファはただ一人

顔も傷もとれた

ムスタツファ

他は子供たちの記憶にはない